

博物館ニュース

MUSEUM NEWS



六十六部廻国巡礼の笈

盛 博氏蔵（当館保管）

この資料を伝えた盛家は、江戸時代、とくに18世紀に栄えた藍商人で、阿波国分寺近くに本拠を持っていました。城下町に出店したり、大坂・江戸などでも事業を展開したりしました。

ところで笈とは、巡礼者や修行僧が仏具や衣類を入れて背負う箱です。この資料は、付属している納札から、享保13年（1728）に盛作右衛門が六十六部廻国巡礼（日本全国66カ国をまわって、1国1カ所の霊場に法華経を1部ずつ納める巡礼）を行った際に用いたことが分かります。内部には、歴代当主らが、四国遍路や西国三十三所巡礼などに際して用いた道具や経典、札、文書が収納されて伝えられてきました。

四国の巡礼というと、四国遍路ばかりが強調されますが、実際にはさまざまな巡礼が行われており、四国遍路はその中の一つの「選択肢」ということもできます。この笈などは、そうした実態をうかがう手がかりとなるものといえます。また、巡礼という信仰にかかわる行動と商業活動との関連なども興味深い問題です。

笈をはじめとする盛家の巡礼関係資料は、特別陳列「旅と祈りの道—阿波の巡礼—」で展示する予定です。

（歴史担当：長谷川賢二）

前方後円墳という形

—宮谷古墳と前山1号墳・2号墳—

高島 芳弘

はじめに

前方後円墳は古墳時代に特有の墳墓形式で、三世紀後半から七世紀前半まで、盛んにつくられました。畿内を中心として東北地方南部から九州地方の南部にかけて分布しています。円丘の片側に方丘を付け足した外形が蒲生君平の宮車模倣説を生み、これが前方後円墳という名称の起源となりました。銚子塚、茶臼山、車塚、二子山などとこの形から呼び習わされているものもあります。

後円部には竪穴式石槨などの埋葬施設があり、1つだけでなく、2つ以上の埋葬施設がある場合もあります。前方部の役割については祭壇説がとられたこともありました。しかし、前方部に埋葬施設があるものもあり、現在のところその評価は定まっていません。

古いタイプの前方後円墳

長い間、奈良県の桜井茶臼山古墳や大阪府の紫金山古墳のように前方部の平面形が長方形で低いものが古く、前方部が高く、端部に向かって開くものが新しいとされていました。ところが、前方部が途中で開くものが古いという見解を近藤義郎が「前方後円墳の成立と変遷」で示し(図1)、バチ形の前

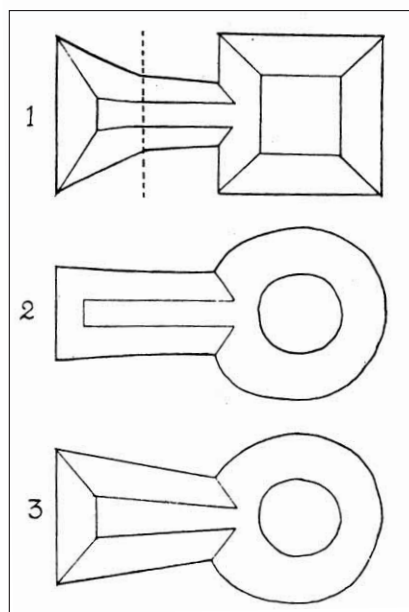


図1 前方後円(方)墳外形の変異(近藤、1968)

方部が途中で開くものが古いという見解を近藤義郎が「前方後円墳の成立と変遷」で示し(図1)、バチ形の前

方部という言葉も使われるようになりました。以後、前方後円墳の墳丘の平面形についてさまざまな研究が行われてきましたが、その成立

と絡めて特に注目されるのは、纏向型前方後円墳と讃岐型前方後円墳です。

纏向型前方後円墳は、寺沢薫によって纏向石塚をはじめとする奈良県の纏向古墳群の検討から提唱された型式です。前方部の長さが後円部の直径のほぼ半分、前方部が小さくその先端がはっきりしないものが多いとされています。

一方、讃岐型前方後円墳は北条芳隆によって香川県、徳島県の積石塚が多く分布する地域の古墳の検討から提唱されました。後円部と前方部の比率はほぼ1:1となり、前方部端を溝で区画するか、高く盛り上げて目立たせています。

東四国における前方後円墳のあらまし

東四国では積石塚の前方後円墳が多く、後円部だけが積石塚となるものもあり、阿讃積石塚分布圏として古くから注目されていました。

香川県には、長さ40m未満の小さな前方後円墳が数多くあります。大きさによりその存在感を示す前方後円墳であるのに、小さな前方後円墳が数多くあるという事実に興味もたれます。古墳時代の前期前半にこの小さなものが圧倒的に多く、墳長40mに満たないものが40基近くあります。新しくなるに従いその数は少なくなると同時に、古墳の大きさは次第に大きくなっていきます。徳島県でも同様に、前期には小さな前方後円墳が多く見られます。

前山1号墳・2号墳と宮谷古墳

前山1号墳・2号墳は、名西郡石井町の標高160mの尾根上に立地し、全長が18mに満たない東四国で最小の前方後円墳です。

前山1号墳は、讃岐型前方後円墳の例としてよく知られています(図2)。後円部はほぼ積石で築かれており、前方部は盛り土で整えられ、その端及び側縁には葺き石が葺かれています。全長17.7m(前方部長9m、後円部径9.7m)あります。

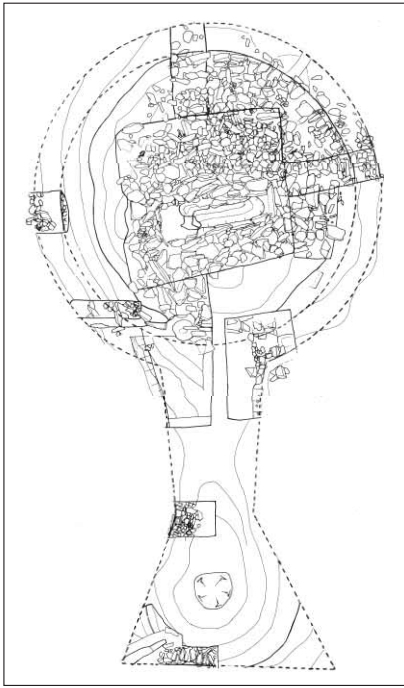


図2 前山1号墳

り、主軸に直交して南北を向いています。内法は長さ約3.1m、幅1m(北側)と0.8m(南側)です。

前山1号墳のように、前方部中程まですぼまり、再び開くという平面形は、鶴尾神社4号墳、養久山2号墳、野田院古墳などに似ています。しかし、前方部中程が一番低く、前方部端が高く盛り上がるという側面観は、爺ヶ松古墳や石清尾山古墳群の双方中円墳である猫塚などに似ています(図2)。

前山2号墳は、全長約18m(前方部長約7m、後円部径約11m)で、くびれ部幅4.5m、前方部の幅6mです(図3)。後円部の中央に2基の埋葬施設があり、それらは主軸にほぼ

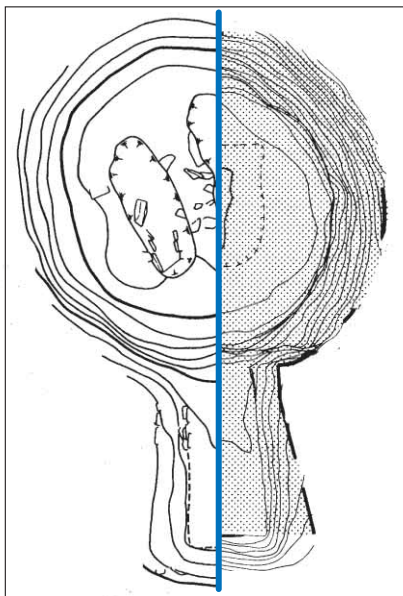


図3 前山2号墳(左半分)と宮谷古墳(右半分)の合成図(天羽[1997]および三宅[2002]による)

後円部との接点から前方部中程にかけて次第にすぼまり、ここが一番低くなっています。幅は2.2mで高さは0.3mです。ここから端に向かって再び開き、高くなり始めます。前方部端の幅は推定で5.5mほどあります。後円部のほぼ中央に1基の

縦穴式石槨があり、主軸に直交して南北を向いています。内法は長さ約3.1m、幅1m(北側)と0.8m(南側)です。前山1号墳のように、前方部中程まですぼまり、再び開くという平面形は、鶴尾神社4号墳、養久山2号墳、野田院古墳などに似ています。しかし、前方部中程が一番低く、前方部端が高く盛り上がるという側面観は、爺ヶ松古墳や石清尾山古墳群の双方中円墳である猫塚などに似ています(図2)。前山2号墳は、全長約18m(前方部長約7m、後円部径約11m)で、くびれ部幅4.5m、前方部の幅6mです(図3)。後円部の中央に2基の埋葬施設があり、それらは主軸にほぼ平行で、長さともに4~5mあります。

徳島市国府町の宮谷古墳は、全長37.5m(前方部長12.5m、後円部径25m)、くびれ部の幅8.5m、前方部の幅15.5mです。前方部はくびれ部付近から若干の湾曲を持って開いていきます

が、くびれ部から2.5m付近のところに屈曲があります。後円部中央に墳丘の主軸と平行して東西方向の縦穴式石槨が1基あります。

宮谷古墳は、前山2号墳のほぼ2倍の大きさで、後円部に対する前方部の比率が少し小さくなっています。前方部は平面的に若干の湾曲を持って開いていますが、上面は平坦で後円部とは段を持って区画されています(図3)。一方、前山2号墳では、この段の部分には階段状に緑色片岩が積まれています(図4)。

徳島県の前方後円墳の特徴

徳島県の前方後円墳は、埋葬施設が東西を向くものが多く、香川県の古墳との共通点が多いと考えられてきました。香川県の前方後円墳は、次の約束事をきっちり守っています。すなわち、前方部と後円部の比率が1:1となること、古墳の縁の葺き石を石垣状に積み上げること、前方部が尾根の上側に位置すること、埋葬施設が古墳の主軸に斜行して東西を向くことなどです。

宮谷古墳では、纏向型前方後円墳に近い平面形です。その縦穴式石槨は東西を向っていますが、畿内の古墳と同様に主軸に平行につくられています。前山1号墳の場合は墳形は讃岐型前方後円墳と考えられますが、埋葬施設は主軸に直交して南北を向くという畿内的なものとなっています。宮谷古墳と前山2号墳は、共に葺き石を石垣状に積み上げていますが、前方部は尾根の下側に位置し、平野の方を向いています。

このように、徳島県の古墳は東四国で香川県の古墳と一体というわけではなく、香川、畿内両方からの影響を受けて前方後円墳を造営したのだと考えられます。(考古担当)



図4 前山2号墳くびれ部の石積み

チラノサウルス類の歯化石



図1 常設展示室にあるチラノサウルス・レックスの全身骨格（複製）

恐竜についてそれほど詳しくない人でも、知っている恐竜の名前を挙げてくださいますと言うと多くの人がチラノサウルスの名前を挙げるのではないのでしょうか。それほど、チラノサウルスは有名で、最も人気のある恐竜だと思います。チラノサウルスは白亜紀後期（約6800～6500万年前）に北アメリカに生息していた獣脚類と呼ばれる大型肉食恐竜の一種です。

徳島県立博物館の常設展示室にもチラノサウルス・レックスの全身骨格化石（複製）が展示されています（図1）。その他に当館にはチラノサウルス類の歯化石が数点収蔵されています。今回は、それらについて紹介します。

チラノサウルス類の恐竜はこれまでに少なくと

も10数属が知られており、現在のところ当館に収蔵されている歯化石は、アルバートサウルス（図2）、ダスプレトサウルス（図3）、そしてチラノサウルス（図4）の3種類です。アルバートサウルス、ダスプレトサウルスは、ともにチラノサウルスと同じ北アメリカで発見されています。しかし、チラノサウルスよりも古い地層から見つかることから、チラノサウルスよりもやや古い時代に生存していたことがわかっています。また、チラノサウルスが全長13mにも達するのに対し、アルバートサウルス、ダスプレトサウルスは全長8～9mほどしかなく、チラノサウルスよりも小さめでした。しかし、これらは共通した歯の特徴を持っています。チラノサウルス類の恐竜の歯の大きな特徴は、歯の横断面がD字型をしていることです（図5）。この歯の形は肉を噛みちぎることに適しており、普通なら折れてしまうほど強い衝撃が加わったとしても、耐えるほど頑丈です。また、歯の後縁には上下に伸びた筋が見られ、鋸歯と呼ばれる小さなギザギザがあります。これはノコギリやステーキナイフのものと同じ役目をしており、肉をえぐり、肉の繊維を切り裂くのに適しています。

チラノサウルスの大きな頭骨にはこのような鋭く尖った歯が大小約60本も並んでおり、きっと、チラノサウルスはこの鋭い歯で獲物に食らいつき、その肉を食べていたのでしょう。

（地学担当：辻野泰之）



図2 アルバートサウルス



図3 ダスプレトサウルス



図4 チラノサウルス



図5 アルバートサウルスの歯の横断面



特別陳列

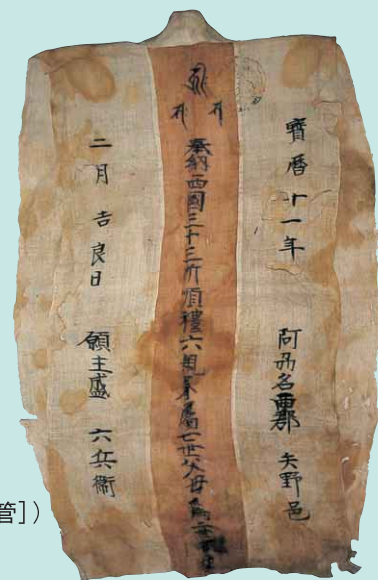
旅と祈りの道

—阿波の巡礼—

阿波の歴史における巡礼といえば、四国遍路を思い起こすことが多いと思いますが、西国や坂東、秩父の観音霊場巡礼、六十六部廻国巡礼なども行われていました。また、観光を兼ねて、伊勢や高野山などへの参詣が行われることもありました。

こうした阿波の巡礼にスポットを当て、歴史の中の道と人との関わりについて考えてみたいと思います。

なお、この展示は、平成18年度を通じて展開している、徳島県博物館協議会連携事業「みる・きく・あるく 歴史の道」の最後を飾る企画でもあります。



おいずる 笈摺(盛 博氏蔵[当館保管])

- 主催 徳島県立博物館・鳴門教育大学
- 会期 平成19年1月19日(金)～3月18日(日)
- 休館日 2月12日を除く月曜日、2月13日
- 会場 徳島県立博物館企画展示室
- 観覧料 無料



西国順礼の道の記・高野詣の記(当館蔵)

展示構成

- 1 巡礼の広がり
— 四国遍路といろいろな巡礼 —
- 2 村と四国遍路
- 3 複合する巡礼行動
- 4 霊場参詣の諸相

関連行事

■講演会「四国遍路研究の新展開」

日時 3月4日(日) 13:30～16:45
会場 文化の森・21世紀館イベントホール
講師

[基調講演] 西海 賢二(東京家政学院大学)
[個別講演]

中世～近世: 武田 和昭(円明院)
長谷川賢二(徳島県立博物館)
近世: 井馬 学(鷺敷中学校)
近代: ディビット=モートン(徳島文理大学)

■展示解説

日時 1月28日・2月18日・3月11日(日)
午後1時30分～午後2時30分
会場 徳島県立博物館 企画展示室

藤重と阿波蜂須賀家

茶道の歴史や、茶道具に関心をお持ちで、藤重という名前をお聞きになられた方はおられませんでしょうか。

御抹茶をいれる茶入の1つに、中次という、円筒形の容器があります。この中次を創り出したのが藤重だと伝えられています。とくに、漆で真っ黒にぬられた中次は、藤重中次と呼ばれることがあります。

藤重は、戦国時代の末に、奈良に現れた漆塗り職人だといわれています。徳川家康が豊臣家を打ち破った大坂夏の陣のあと、家康の命令で、藤重藤元・藤巖という親子が大坂城の跡に入りました。親子は焼けた名物茶入を拾い集め、漆でていねいに修復し、家康に差し出しました。家康はその褒美として、付藻・松本茄子という2つの名物茶入を与えました。

この付藻・松本茄子茶入は、現在東京の静嘉堂文庫美術館が所蔵しています。X線調査などによ

りますと、砕かれた破片を漆で固め、焼き物の色合いや質感まで見事に復元しています。

藤元は、茶道具の袋縫いや、茶入の鑑定もしました。彼以後、子孫が幕府の御用職人となり、将軍家の茶道具を管理する役目を務めました。しかし、藤元がいつ頃の人で、戦国時代の藤重と同一人物なのかどうか、詳しいことはわかっていませんでした。

徳島大学附属図書館には、藩士が蜂須賀家に提出した各家の成立書が保存されています。近年、その中から、藤重の分流が江戸後期に提出した成立書が発見されました。これを皮切りに、東京の国文学研究資料館史料館が所蔵する『阿波国徳島蜂須賀家文書』に、藤元とその分流に関する記録が、いくつか見いだされました。

実は、藤元と初代藩主蜂須賀至鎮は交流がありました。そして1620年代の寛永のころに、藤重の分流が、京都に本拠をおきながら藩の御用町人

になり、やがて後代が藩士になりました。明治時代に、徳島市の佐古で活躍した南画家藤重春山は、その末裔です。

蜂須賀家側の記録をもとに、ほかの資料もあわせて検討すると、藤重藤元は、慶長から寛永10年代（1600～1630年頃）にかけて活動したことがわかります。茶人でいえば、細川三斎と同じ世代になります。そして戦国時代の藤重は、その何代か前の天文頃（1600年代前半）の人で、奈良の春日大社と関係があったと推測されます。

（美術工芸担当：大橋俊雄）



春山 轟泉図



春山 鳴門図

この種子は何でしょうか？ 浜辺で拾いましたが…

～モダマのなかま30年ぶりの記録～

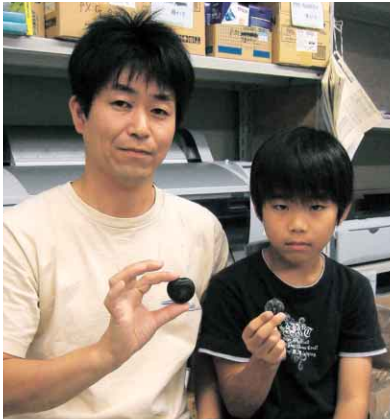


図1 モダマのなかまやククイノキなど“珍品”をたくさん拾われた美波町の濱さん。本当にうらやましい。

「以前、浜辺でいろいろな種子を拾ったんですが、名前がわからないものがありまして…」この夏の普及行事で徳島県の県南に漂着物を拾いに行った時のことです。参加者の濱さんからこう質問がありました(図1)。手に掲げられたケースの中には、たくさんの種子がきちんと整理されているようです。“何だろう？”と、差し出された箱の中を一目見て愕然としました。「こ、これは！モダマじゃないですか！しかもククイノキもある！（図1～3）」私は、ここ数年海岸に流れ着く種子や実を探して歩いています。いまだにモダマもククイノキも拾ったことがありません。全く脱帽です。

モダマのなかまは、熱帯から亜熱帯地方に自生



図2 モダマのなかまの種子：漂着種子の最高峰。一度は拾ってみたい。



図3 ククイノキの種子：一見化石のような感じがする。

「以前、浜辺でいろいろな種子を拾ったんですが、名前がわからないものがありまして…」この夏の普及行事で徳島県の県南に漂着物を拾いに行った時のことです。参加者の濱さんからこう質問がありました(図1)。

手に掲げられたケースの中には、たくさんの種子がきちんと整理されているようです。“何だろう？”と、差し出された箱の中を一目見て愕然としました。「こ、これは！モダマじゃないですか！しかもククイノキもある！（図1～3）」私は、ここ数年海岸に流れ着く種子や実を探して歩いています。いまだにモダマもククイノキも拾ったことがありません。全く脱帽です。

モダマのなかまは、熱帯から亜熱帯地方に自生する常緑のツル性のマメ科植物で、日本では鹿児島県の屋久島などに生えます。この種子は水に浮き、ココヤシと同じように海の潮の流れで分布を広げます。黒く艶があり直径が5cmにもなるととても大きな豆で、浜辺の漂着種子を集めている人達のアこがれの的なのです。このモダマについては、古くは江戸時代の本の中にも「四国や九州に流れ着くものである」と記録されており、当時は印籠の根

付など飾り物として大切に使われてきました。

徳島県で初めてモダマのなかまの漂着が記録されたのは、昭和35年頃の大手海岸で、その頃2つ拾われたとのこと(河野圭典氏私信)。その後、昭和40年代に美波町の明丸海岸でも採集されています(東六郎氏採集：当館蔵)。しかし、いずれもかなり古いことなので、今回の発見は“30年ぶりの快挙”ということになります。

また、ククイノキの方は、マレーシア原産のトウダイグサ科の樹木で熱帯各地で栽培さ

れています。この植物の種子から取れる油は、灯油や石鹸の材料などになるため、“キャンドルナッツ”などとも呼ばれています。以前、沖縄県で博物館の方に見せていただいたことがあったのですが、まさか徳島県で再会できるとは思いませんでした。もちろん本県への漂着は初記録です。

濱さんはこの後も海岸を歩かれ、シロツブのなかま(図4)やシャカトウと思われる実(図5)を発見しています。また、この他にもアダンの実を採集した方もいます。これらはいずれも徳島県初記録のものばかりで、今年の漂着種子は大盛況です。

さて、私の方はと言えば、皆さんの大漁に刺激されて海岸にせっせと通っているのですが、いっこうに思わしい収穫がありません。尋ねてみると他の人が行った後だったりしてがっかりなどということもありますが、負けずに“今度こそ珍しい種子を拾うぞ！”と思っています。



図4 シロツブのなかまの種子：日本の沿岸に漂着するものはシロツブかハスノミカヅラであるとされるが、両者の区別は困難。



図5 シャカトウと思われる実：熱帯の果物で、大きさは2cmほど。

(植物担当：茨木 靖)

1月から3月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	対象(定員)
歴史体験	ペーゴマをまわしてみよう	1月21日(日)	13:30~15:30	小学生から一般(30)
	古墳見学②	3月11日(日)	10:00~15:00	小学生から一般(40)
歴史散歩	池田を歩こう	3月18日(日)	10:00~14:00	小学生から一般(20)
	室内実習	ミクロの世界—電子顕微鏡で昆虫を見よう②	1月28日(日)	10:30~12:00(午前の部)
		13:30~15:00(午後の部)		小学生から一般(10)
アンモナイト標本をつくろう		2月11日(日)	13:30~15:30	小学校高学年から一般(20)
ミクロの世界—電子顕微鏡で植物を見よう		2月18日(日)	13:30~15:30	小学生から一般(10)
古い掛軸や額を調べてみよう		3月18日(日)	13:30~15:30	小学生から一般(20)
特別陳列関連行事	小中学生のための昔の道具調べ	3月25日(日)	14:00~15:00	小・中学生(一般も可)(20)
	特別陳列「旅と祈りの道」展示解説①	1月28日(日)	13:30~14:30	小学生から一般
	特別陳列「旅と祈りの道」展示解説②	2月18日(日)	13:30~14:30	小学生から一般
	特別陳列関連講演会	3月4日(日)	13:30~16:30	小学生から一般(300)
	特別陳列「旅と祈りの道」展示解説③	3月11日(日)	13:30~14:30	小学生から一般

◎特別陳列関連行事については、原則として申し込みは不要です。(ただし、一部に定員を設けている関連行事もあります。)

◎その他の行事については、往復はがきでお申し込みください。

◎「ミクロの世界—電子顕微鏡で昆虫を見よう②」の申し込みは、「午前」か「午後」の希望を書いてください。

◎小学生が参加する場合は、保護者が同伴してください。

◎行事の参加費は無料です。

普及行事のお申し込みについて

◎1枚の往復はがきには、1行事のみご記入ください。

◎行事日の1カ月前から10日前までに必着で下記までお申し込みください。

◎返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入しておいてください。

◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳しいことは当選された方にお知らせします。

【記入例】			
〈往信の表面〉	〈返信の裏面〉	〈返信の表面〉	〈往信の裏面〉
50 770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館 普及課	(何も書かないでください)	50 □□□-□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1. 参加希望の 行事名 2. 参加希望者名 (学年) 3. 住所 4. 電話番号

※お問い合わせは、徳島県立博物館普及課へ(電話088-668-3636)

友の会の行事紹介

2006年9月、友の会の一泊研修「戦国城下町 一乗谷への旅」を行いました。会員39名の方が参加し、有意義な研修旅行となりました。

第1日 ○滋賀県立琵琶湖博物館
○一乗谷復元城下町

第2日 ○若狭三方縄文博物館
○若狭歴史民俗資料館
○御食国若狭おばま食文化館



若狭三方縄文博物館にて

博物館ニュース No.65

■発行年月日 2006年12月1日
 ■編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山
 TEL088-668-3636 FAX088-668-7197
<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/>